

主と官府との癒着、その結果としての大土地所有の展開は、明初の社會に元朝のつげとして引き渡された。有名な洪武朝の疑獄事件は、一つにはこうした状況からの脱皮のために斷行されたものだろう。官僚機構の改革と並行して、鄉村では、いわゆる利益追求型富民・地主層に對する籍沒・移徙等の徹底した彈壓が加えられた。王朝の理念としての富民像は、あくまでも鄉村維持型にあり、富民・地主層の淘汰を経た上での明朝支配の確立が圖られたのである。ここに理念に適用一つの典型として、義門鄭氏がクローズアップされることになる。本報告では、鄭氏という一地主家族を通して、元末明初の江南社會の状況、ならびに明朝の性格を検討したい。

### 李朝後期の水利開發について

宮嶋博史

朝鮮農業と水の關係を考へる場合、二つの自然條件が大きく関わってくる。その一つは氣候條件、とりわけ降雨量である。朝鮮半島の降雨は、年間降雨量では中國華北と日本との中間的な數値を示すが、月別降雨量の分布では華北と似通っているという特徴を持つ。すなわち七〜九月期に年降雨量の六〇パーセントほどが集中し、春季の乾燥が甚しいのである。また梅雨前線は朝鮮半島にまで北上しないことが多く、これが田植法の普及を遅らせた最大の要因であった。

もう一つの自然條件は土壤である。李朝時代には中國や日本に學

んで、水車を製造・普及させる努力が繰返し行なわれるが、盡く失敗に終わっており、その最大の要因は土壤の排水性が良すぎるといふ點にあったようである。

以上二つの自然條件に規定されて、水の安定的かつ十分な供給には困難が多く、李朝時代の農業發展の重點は、むしろ耐乾燥技術の開發に置かれたと言いうる。しかし一方で水利開發の努力が持續されたことも事實であり、特に十五世紀前半と十八世紀は大規模な水利事業が集中した時期として注目に値する。報告では、後者の時期の水利開發の實態とその特徴を、前者の時期と比較しつつ論じてみたい。

### 漢代賢良方正科考

福井重雅

漢代の官吏登用制度は、從來一般に郷舉里選の名によって知られているが、それは大別して州郡の長官が推す孝廉・茂才などの推舉制度と、中央や地方の高官が擧げる賢良方正などの察舉制度という二つに分けられる。前者は毎年郡國の人口に比例した一定の員數の該當者を推舉する定期的な選舉法であり、後者はいわゆる天變地異などの異常事態が発生したばあいに、皇帝自身が候補者に直接策試する非定期的な選拔法であつて、それらは後世一般にそれぞれ常科（常舉・歲舉）と制科（制舉・特舉）とに區別され通稱された。

この選舉制度のうち、少なくとも前者の科目については、これま

ていくつかの研究が世に問われていて、その實際がかなり明らかにされている。しかし後者の科目については、今日までそれを専論した考察がきわめて少ないために、その内容についてはほとんど不明のままの状態にあるように思われる。

この報告はその後者の制度を明らかにするために、主として察舉による敎官の問題を取上げて、ある被察舉者が賢良方正などに指名されて新しい官職に任命されるばあい、そこにどのような昇進の基準が設けられていたか、という運営の實態について考えることにする。そしてその昇進の基準が當時の官僚制度全體といかに関連するかということを探索することによって、そこに露呈されるはずの二三の問題點について、多少の検討を試みることにしたい。

### チャハルのブルニ親王の亂をめぐって

森川 哲雄

モンゴル史における一七世紀は、まさしく激動の時代と言えよう。チャハルのリグダン・ハーンの敗死と内モンゴルの清朝(後金國)への併合、ジュンガル王國からの壓迫を契機とする、外モンゴルの、清朝への降付は、それを象徴するものである。こうした中で、モンゴリアには様々な問題が生じた。その一つがチャハル王家に関する動向である。周知のように清朝政府は、チャハル王家に對し、他の諸公とは異なつた待遇を與えていた。しかしチャハル王家はチンギス・ハーンの嫡系であるということで、必ずしも清朝に信服はし

ておらず、また清朝政府にとつてもその處遇には十分な注意が必要であつた。しかし吳三桂の反亂を契機に、當時のチャハル王家の長たるブルニ親王が亂を起こすと、清朝はこれを直ちに鎮壓、さらにはチャハル王家を斷絶させたのである。このブルニ親王の亂については史料も少なく、また十分な研究もなされていない。そこでブルニが亂を起こした原因、その失敗の理由、またこの亂をモンゴル人たちがどのようにみていたか等について検討してみたい。

### マムルーク朝時代のクース・アイザーブ道

——特に al-Tujibi の巡禮記に依る——

家島 彦一

ムスリム社會におけるメッカ巡禮は、單にその宗教的義務を遂行する目的だけに留らず商人・出稼人・職人・學者知識人・移住亡命者達たちが往來し、國家や地域社會の枠を越えて、イスラム世界全體のなかで人・物・情報などが交流し融合し合う重要な役割を果たしてきた。マグリブ地方のムスリム社會にとつて、メッカ巡禮は、言わば邊境のアトラス山間部から出て、廣く東方イスラム世界の學術・文化と社會にふれる好機であつて、とくに十一世紀後半以降の激しく變容する社會情況のなかで、マグリブ巡禮者たちの數は激増した。また、彼らは多くのメッカ巡禮記(Ḥajj-nama)を残しており、それらの記載内容にはエジプト・シリアやイラク地方の社會・經濟情況を伝える、極めて重要な記録を含んでいる。私は、とくに十三